

第22回 村田英雄の無冠と『王将』の悲運

戦後歌謡史に残る『王将』は、昭和37年最大のヒット曲ですが、この年、第4回レコード大賞を獲得するには至っていません。この年の大賞受賞曲には『いつでも夢を』が選ばれ、歌唱賞は『星屑の町』（三橋美智也）、新人賞は『なみだ船』（北島三郎）、『下町の太陽』（倍賞千恵子）が受賞、結局『王将』は『アカシアの雨がやむとき』（西田佐知子）とともに特別賞受賞に留まっています。全曲共いまだに歌われている名曲揃いの年でした。

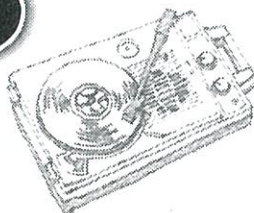
当時、レコード大賞の対象期間は、その年に発売された曲となっていて、『王将』も『アカシア』も前年発売がネックとなり選考対象外とされましたが、「特別賞」を新設して敬意を表し、お茶を濁すこととなりました。

『王将』のシングル盤発売は昭和36年11月ですが、吹き込みは同年4月と、かなり遅ります。実は『王将』は、同年9月発売の歌謡浪曲『王将』のLP用に収録したものでした。LP

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵 松本浦



P発売後、関西地区で好評だったことからシングルカットされ、さらに年末の紅白歌合戦で村田が『王将』

の3番の歌詞「何が何でも勝たねばならぬ」を白組勝利になぞらえて歌ったことから人気に火が付き、明けて昭和37年、『王将』人気は爆発し、長期にわたりラジオから流れ続けました。小学5年生の夏休み、我が家の改築のため仕事に来ていた鳶職の人が、昼休みにラジオから繰り返し流れてきた『王将』を耳にしながら、一緒に口ずさんでいたのを覚えています。猛暑の折、着衣を脱いだ親方の背の見事な倶利伽羅悶々（入れ墨ですね）の映像と『王将』を歌う声が重なって記憶されています。

後年、北島三郎とともに東映の任侠映画に出演し、見事な侠客ぶりを見せてくれた村田英雄ですが、高倉健主演の『日本侠客伝 雷門の決斗』（昭和41年）では、浪曲師・櫻井梅芳（春日井梅鶯のもじりですね）として、得意の喉を数分披露しています。村田の浪曲披露の映像は少ないので、貴重なシーンです。

同年、村田は紅白歌合戦に2年続けて出演し『王将』を2年続けて熱唱していますが、白組の最後から3人目で登場、トリは前出の三橋美智也が『星屑の町』で締めています。実は、紅白の紅組トリは、第1回以来、昭和37年（第13回）まで、渡辺はま子、二葉あき子、笠置シズ子、美空ひばり、島倉千代子のコロムビア所属の歌手で独占されています。この年も島倉が3年連続で務めることが決定し、白組のトリまでコロムビア所属の村田が務めるのはまずいのではないかと付度されたことで、村田のトリはなくなりませんでした。

三橋美智也や三波春夫が何回もトリを務めているのに比べるときびしい気持ちもありますが、『王将』と村田の無冠は、記録よりも記憶に残る棋士・阪田三吉が生前無冠だったことと重なり、これはこれで男・村田らしいエピソードのように感じます。